

生徒の勤労観をはぐくむ進路指導の工夫

- 地域の産業を生かした体験学習を通して -

群 教 ゼ	G11 - 02
	平16.220集

特別研修員 齊藤 章 (高山村立高山中学校)

《研究の概要》

本研究は、自分の進路や働くことに対する生徒の意識を高めるため、現状では必ずしも効果的な学習となっていない職場体験学習について、親や地域の職業人に対する取材活動や体験場所の意図的な割り振りといった、ねらいを絞った事前指導及び事後指導を、計画的な指導過程によって実施することにより、生徒に働くことの目的や意義を考えさせ、生きる力としての勤労観を育成することができることを明らかにしようとしたものである。

【キーワード：進路指導 勤労観 体験学習 地域との連携 ポスターセッション】

主題設定の理由

本校2年生の実態を調べると、生徒は自分の進路について不安や迷いを感じている。反面、自分に適した職業は何かといったことにまでは考えが至っていないようである。また職業の種類はもとより、仕事に携わる人々の認識等についても仕事は大変だという漠然としたとらえ方をしている生徒が多い。そのため、実際に社会の中で働く人々に接し、労働を体験学習することは働くことに対する意識を高めていくうえで、生徒にとって大切な活動になると考える。本校でもこうした考えのもと職場体験学習を行ってきた。しかし、生徒の中には単に仕事を体験したにとどまり、働く意義等の考察場面で十分とはいえない場合もあった。

そこで、職場体験学習に対する生徒の意識を変えるために、事前指導と事後指導の指導過程を工夫しようと考えた。具体的には、事前指導において、働く目的と意義について考える学習や、自己理解を深めさせる学習を通して意欲付けを図り、事後指導では、自分が体験して得たことを報告書にまとめ、情報交流による学習を行う。なお、事前に生徒の体験場所はあえて希望以外のところに意図的に割り振る。

またその際、体験学習の職場は、地域にある産業(耕種農業 蒔蒔、花作り等、畜産農業、老人福祉・介護事業、各種食料品小売業等)を指定して、地域の職業人との連携を図りながら共同して指導にあたっていきたい。

以上のような指導過程を通して、働くことの厳しさと仕事をやり遂げた喜びを得るとともに、働くことには社会に貢献するという面があることを体験的に感じ取らせ、生徒自身が、自ら将来はやりがいをもって仕事をしていきたいという肯定的な勤労観を育てることができると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

まず、事前学習で働く目的と意義について考えさせ、次に体験学習の場を地域の産業に設定し、意図的に体験場所の割り振りをする。その上で細かい心構えや働くということについて興味付け・意欲付けを図って体験学習に取り組ませる。事後学習では、自分の体験を通して得たことをまとめて発表し互いに意見交流をするが、その学習過程において、働くことには厳しさとともに、それを成し遂げる喜び、集団の一員として役割を果たすやりがいがあることを気づ

かせるための働きかけを指導者が行う。これらの指導を計画的に行うことにより、生徒の勤労観を育成することができるということを実践を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 家族に働くことについてのインタビューをし、それに対する自分の考えをまとめて出し合わせる学習と、身近で働く人の講演を聞くことにより、働く目的と意義について考えさせる。これらを通して、働くことには経済的な面だけでなく、各個人の生き方や社会的な面などに関わる目的や意義があることに気づくであろう。
- 2 体験先は、興味関心の少なかった分野の仕事を意図的に割り振ることで、単純な興味や関心によって希望した仕事を模擬体験する場合とは違って、その仕事のもつ様々な面を客観的に見ることができ、その結果働く人々の気持ちや目的は何かを意識するようになり、働くことの意義についての考察をすることができるであろう。
- 3 体験学習の事前指導で各自の目標と心構えをもつ時や、事後指導で働くことの意義について考える学習をする際、全体集会といった一斉指導で済ませるのではなく、教師を交えて事業所ごとに話し合う場面を設定すれば、事業所の方の仕事に対する考え方や取り組み方についての考察を深めることができるであろう。
- 4 働くことの意義を考える学習を事業所ごとに行った後、体験して得たことをまとめて発表し、どの仕事でも働くことには厳しさとともにやり遂げる喜びがあること、社会に貢献するという面があることに、意見を交流する中で気づかせることで、将来は社会の役に立つ、やりがいのある仕事をしたいという肯定的な勤労観を育むことができるであろう。

研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 育成しようとする「勤労観」

ここで育成しようとする勤労観とは、どの仕事にも共通した、働くことには厳しさがあるが、それをやり遂げた時の喜びや社会に貢献するという面があり、自分も将来は人々の役に立つ、やりがいのある仕事をしていきたいという前向きな気持ちのことと考えている。現在は働くことに対して深く考えていない生徒に対して、こうした、どの仕事にも共通する意識を育むため、この体験学習の指導過程の中で繰り返し、働くことについて考えさせていきたい。

この勤労観を土台にして、職業についての理解を深め、認識を新たにし、どんな職業に就くかの方向性を見いだすことができる職業観の育成に発展させたい。

(2) 地域の産業を生かした体験学習

都会のように多くの産業や職場はなくとも、地元の子供達を育てようと考えてくれる地域の人々との連携が図れ、農業や福祉事業等といった働くことの意義を体験的に学習する上でふさわしい職場がある地域の産業を生かそうと考え、村内の事業所を対象に体験学習を設定した。本校の総合的な学習の時間では、地域学習を各学年で行っていて、2学年では地域の産業を見つめ直すという計画の中で学習を進めていく。その体験学習の一つとして実施していきたい。

(3) 「ていねいな話し合い」

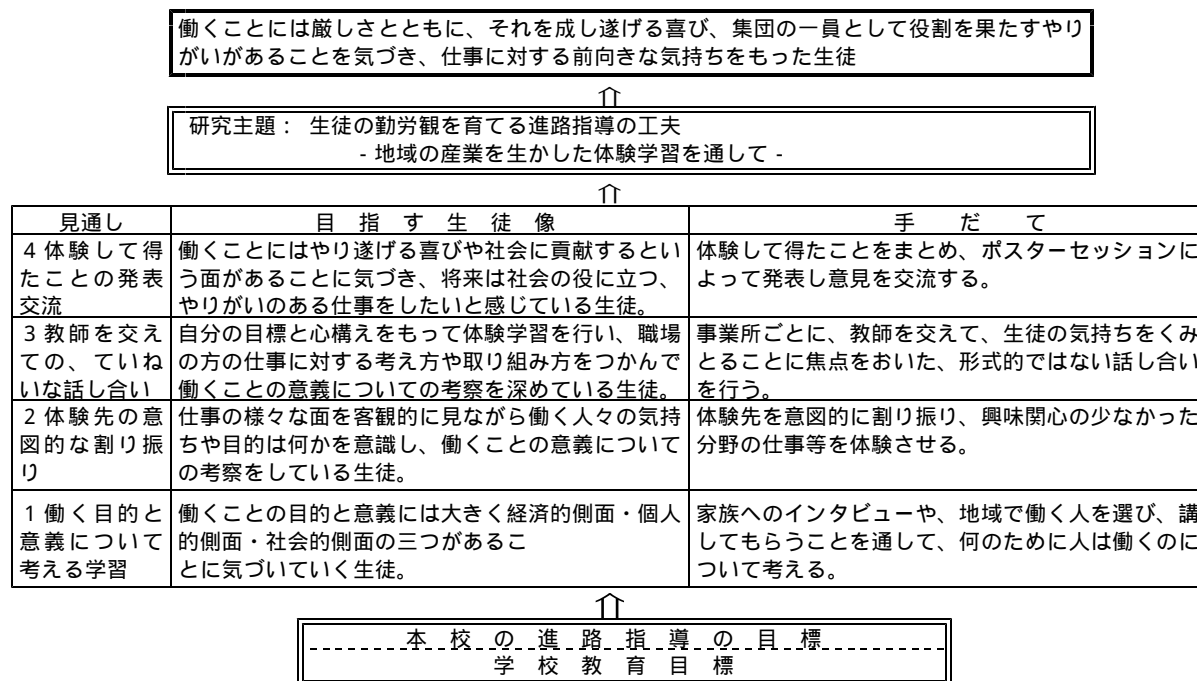
事前学習で心構えを持つ時や事後学習で働くことについて考える時等に、教師を交えて事業

所ごとに行う、生徒の気持ちをくみ取ることに焦点をおいた形式的ではない話し合いのことを、ここでは「ていねいな話し合い」と考える。

(4) 意見を交流する活動

体験学習後に事業所ごとに自分たちは何を学んだのか、働くことの意義は何かを明らかにさせる。その後それらを踏まえてポスターセッション方式を取り入れた発表と意見の交流をさせる。これにより生徒は多くの考えに触れながら、働くことの意義はどの仕事にも共通していることに気づき、自分も将来は社会の役に立つ、やりがいのある仕事をするのが大事であると感じるようになるであろう。

(5) 全体構想図



2 実践の概要及び結果と考察

実践にあたっては、表1に示した計画に基づいて指導を行い、検証については学年全体の学習活動の様子を観察し、ワークシート及び活動後の生徒の感想を分析して行う。

(1) 身近な職業人である親や地域で働く人への取材活動を通して、働くことには経済面だけでなく目的や意義があることに気づかせる。(見通し1)

ア 実践の概要

働くことについて学習を始めるにあたり、まず身近な職業人である親に、働いていて大変なことや嬉しいこと等についてインタビューをし、考えたことを話し合った。さらに、地域で働く人の講演を聞いて働くことについて考えた。

イ 結果と考察

身近な職業人に取材をして情報を得ることは、生徒にとって印象が強く、働くことについて

表1 実践の経過

	活 動 ・ 指 導 内 容
7～8月	体験事業所を決定する。教員が事前訪問をする
9月	ガイダンスをする 性格等を項目ごとに書き出して自己理解を図る 親へのインタビューをし、地域の職業人の講演をきく 意図的に班分けをする 訪問や電話の仕方を確認し、アポイントメントをとる
10月	生徒が事前訪問し、体験学習当日の打ち合わせをする 各自がねらいや心構えを明確にする 緊急時の確認等、体験前指導をする 産業体験学習を実施する。体験日誌を書く 礼状を書く
11月	体験で得たことを考察し、班ごとに報告書にまとめる ポスターを作成し、発表の準備をする ポスターセッションで意見交流する
12月	事後訪問をする

具体的に考えていく上で効果があると考え実践を進めた。インタビューした結果を生徒に聞くと、「具合が悪くても休めない」「気持ちが相手に伝わらない」時等の大変さはあるが、「感謝の言葉を言われた」「納得のいく仕事ができた」時等には嬉しさを感じるという意見が出された。これらをもとに働くことについて考えさせると、「仕事は多くの人のためにある」「頑張った分だけ喜びを得てまた仕事に励める」「自分の成長も得られる」といった考えが出され、働くことには社会の一員として貢献するという意味や、向上心をもって自分を成長させるという意味もあるという意見にまとまっていった。また、地域の職業人を招いての講演後は、苦労の中で目標をもって資格を取り働いてきたことに共感し、「意志をもってあきらめず努力したい」「頼られる人になりたい」「他人の役に立つ人になりたい」等の感想が出され、生き方について考えたことがうかがえた。

このように具体的で実際の様々な体験を通して得られた職業人の考えに触れることによって、生徒は働くことの意義についても考え始めるようになり、働くことの経済的な面だけではなく、社会的な面や個人の生き方などにも目を向けることが必要だと気づくようになった。

(2) 体験先を意図的に割り振り、興味関心の少なかった分野の仕事を体験させることによって、客観的に仕事を見ながら働くことの意義について考察することができたか。(見通し2)

ア 実践の概要

地域にある事業所を事前に選出して生徒に提示し、希望を出させたあと、様々な仕事の中から働くことについて学んでほしい旨を説明しながら、あえて希望調査の時点では挙げられていなかった事業所や希望順位では下位にあった事業所に意図的に生徒を割り振った。

イ 結果と考察

耕種農業(蒔蒔)を体験した男子は体験学習を終えて、「最初の希望とは違ったけど、こんにやく作りを選んでとてもよかった」とし、「力仕事は辛かったが、その分嬉しさも他の仕事より多く、自分が作ったこんにやくは店で売っているこんにやくよりおいしい」と感想を書いた。(資料1)

また、畜産農業を体験した女子は「生き物と関わる仕事は大変だけれども、その分達成感などがあると思います。他の事務のような仕事を選んでいたら、社会に必要とされ役立っている仕事だということに気づかないで毎日を過ごしていたと思います。普段では絶対にできない体験ができて、とてもよかったと思います。」と書いた。

このように生徒は、興味・関心で事業所を選んでいたら考えなかったことがあることに気づき、視野を広げ様々な面から仕事を見ていくことの必要性を感じながら、働くことの意義を考えている。

自分が興味・関心をもっている職業を選ばせる場合、それはその職業に対する好印象の、つまり思い込みという位置づけから始まってしまい、職業を知ることとイメージにあうかどうかの判定を主な目的としてしまうことも多い。そして良好なイメージをもっていたとしても想定外の大変な面に気づいて、その職業がかえって嫌いになったり、また希望が強い場合には、辛い部分を見過ごしたまま全体をとらえた気持ちになったりすることも予想される。したがって、上記の感想にも見られるように、職業を客観的に見て働く人々の気持ちや取り組み方を知り、働くことの意義をとらえさせることをねらうために、生徒の希望に沿って職業選定をするのではなく、むしろ体験先を希望していない職業に割り振ることが、勤労観を育成することに有効であ

資料1 農業を体験した男子の感想

僕は、こんにやく作りを選んでとてもよかったと思っています。最初の希望とは違ったけど、もしそこに行っていたら、道半端でいるだけで終わってしまったと思います。それに、こんにやく農家では他ではできないような貴重な経験がたくさんできたと思います。それに松井さんたちは、こんにやくの事はもちろんそれ以外にもいろいろと教えてくださいました。

こんにやく掘りは力仕事が多くあって、辛いこともありました。でも辛い事があったから、うれしさも他の仕事よりもとても多いのだと思いました。例えばこんにやくを掘って普通の食べられるようなこんにやくにしたことです。こんにやくの掘り取りも力仕事があったり、ずっと座っているのが腰も痛くなるし、泥だらけにもなって大変な仕事です。でもその分普通の食べられるこんにやくにしたとき、すごくうれしかったです。店とかで売っているこんにやくよりもずっとおいしかった気がします。僕はこんにやく農家を選んでとてもよかったなと思いました。

ると考える。

(3) 指導については、事前指導と事後指導における話し合いを、細かく系統的に行うことで、働くことに対する考察を深めることができたか。(見通し3)

ア 実践の概要

事前指導では、事業所ごとに現場を想定した具体的なシミュレーションを通して予想される事態について考えさせ、心構えをもたせた。事後指導では、各生徒が体験からとらえたことをもとに、働くことの意義を考えさせた。教師を交えた、こうした事業所ごとの話し合いを組み合わせることで考察を深めた。

イ 結果と考察

生徒は、目標と心構えを念頭に仕事に取り組んで、多くを学び、考えて報告書を作成した。

耕種農業(花作り)の班では、細かい作業が続くことや汚れること等の心構えを確認した。当日は農家の方と笑顔で話しながらも手は休めずに最後まで作業に取り組めた。生徒は「達成感を味わえた」と感想を書いた。農家の方も生徒の努力を認めて来年もぜひ来てもらいたいと話していた。事後の活動の振り返りでは、各自が体験日誌をもとに考えを述べた。その中で働くことの意義に焦点を絞らせると「勉強した技術で育てた花を、人に喜んでもらった時の嬉しさ、やりがい」「1つのことをやり遂げたときの達成感」とまとめた。

福祉施設で体験する生徒達は、お年寄りのスピードにあわせる必要があること、話は繰り返しが多いこと、明るい話題を選ぶ必要があること等を考えた。体験では、「接し方は一人ずつに対応させる」ことや、「お年寄りのちょっとした変化も施設の人は気がつく」「手すりは低い位置にある」等を発見した。施設の方の話では「自分からお年寄りの中に入り、目線をあわせて気遣いながら様々な話題で話したり、働いたりすることができ、それが入所者に元気を与えるようであった。施設にとってもありがたく良かった。」ということであった。そして、体験後の活動の振り返りの場面で話し合った結果、資料2のように生徒は働くことの意義を「その仕事の知識や技術を身につけて役立てるため」「社会のため、お年寄りのため」等とまとめた。

以上のような各事業所単位における事前指導を通して、体験学習をする上での目標や心構えもはっきりし、働くとはどういうことかについて意識を集中させて活動していくことができるようになり、事後指導では個々の体験から得たことを考察して、職場の方の仕事に対する考え方や取り組み方などについての考察を深めることができたと考える。

(4) 体験して得たことをまとめて意見を交流することによって、どの仕事にも共通する働くことの意義に気づき、仕事に対する前向きな気持ちをもつことができたか。(見通し4)

ア 実践の概要

仕事の概要や体験して得たことを、イラストや写真、表、また項目名に分けて模造紙にまとめ、ポスターセッションの形式で発表し、他の班の生徒と交流をした。その際には、学年全体を前半発表する班と後半の班の2つに分け、それぞれで各班が同時進行のセッションを行った。交流を十分に行わせるため、1回ごとに聞き手の生徒は発表を聞く班を決めて移動するようにした。

イ 結果と考察

資料2 福祉の体験報告書の一部

体験した仕事のよいところ ・お年寄りと話すことができた。 ・笑顔でいられる。 ・やりがいがある。 ・社会勉強になる。 ・いろいろ考えさせられることがある。
「働くこと」に関して、発見したこと、感じたこと、学んだこと、考えたことなど ・お年寄りという話ができて、いろいろ学べる。 ・「やりがい」と言われるととてもうれしく感じる。 ・一つ一つの行動にとっても気をつけなければならぬ。 ・人の役に立った達成感がある。 ・大変なこともあるけど、楽しくてやりがいがある。 ・人生の先輩だから一つの言葉が参考になる。 ・お年寄りの方々の会話などが、楽しく、学ばせられることがたくさんある。
働くことの意義 ・その仕事の知識や技術を身につけて役立てる。 ・自分の能力を向上させる。 ・人のために自分を役立てる。 ・社会のため、お年寄りのためになる。

発表者は用意しておいた文章を読むのではなく、その場でエピソードを盛り込むなど、考えて発表した。作成時から発表場面について意識付けをして指導を重ねたため、生徒は熱心に自分の体験や思いを伝えようとしていた。交流タイムでは、聞き手も発表者も、自分の体験と照らし合わせながら多くの質問を活発に行っていた。(資料3)

これらを通して、生徒は「人の力になれた、社会のためになったという喜び、達成感を得ること」「その仕事の知識や技術を身につけて能力を高め、人のために役立てること」などと働く意義についてとらえ、いろいろ交流した中で働く意義は何の仕事にも共通していることであると気がついて、まとめていった。そして将来は「やるからには自分の力を最大限に生かせるやりがいのある仕事をしたい」、「社会の一員として責任をもって働きたい」と考えた。

このような結果を踏まえて今後の中学校生活をどう過ごすかを考えさせると「社会に出た時のために、授業に集中して身につける。係の仕事や挨拶をしっかりとる。集団生活の規律を学ぶ」ことなどが必要だという前向きな意見が多く見られた。

このように、ポスターセッションを通して多くの具体的な話を聞き、他グループの考えを自分たちと比較しながら知ることで、どの仕事にも共通して働く意義があることに気づくとともに、仕事に対する望ましい考え方ができるようになったと考える。

資料3 ポスターセッションの様子



研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

生徒に、働くことの意義を体験的に感じ取らせ、将来やりがいをもって仕事をしていきたいという肯定的な勤労観を育むために、以上のような指導過程によって、「働くことの意義は何か」について繰り返し指導していくことは効果的であったと考えられる。

その中でも、見通し2の意図的な割り振りは、仕事の模擬体験という段階で学習を終わらせることなく、客観的に仕事を見て働くことの意義に焦点を絞って体験学習をするうえで効果があった。

また、どの生徒も体験によって多くのものを感じ取っているが、問いかけによりそれを引き出さないと、意識化されないままになってしまう場合や、考えが浅い状態で誤解をもつ場合も考えられる。見通し3での指導のように、事前や事後の活動において、全体集会や発表会といった一斉指導で終わるのではなく、体験事業所ごとに教師を交えてのていねいな話し合いを行うことは、生徒の考えを引き出し、深めるうえで重要な点であると考えられる。

2 今後の課題

生徒に肯定的な勤労観を育むには、指導過程の中で様々な機会を通して、働くことの意義は何かを、ことあるごとに問いかけて考えを深めさせることが重要である。例えば、農業体験の前に社会科の農業単元を活用して、現在の農業の概況や流通面の概観を教材にするなど、他教科や道徳等と関連させることで、さらに学習が深まる可能性が考えられる。

参考文献

- ・進路力を育てるネットワーク 編著 『進路力を育てる総合的な生き方の学習プラン』
実業之日本社(2001)